

松村昌家著

## 『大英帝国博覧会の歴史

——ロンドン・マンチェスター二都物語——

ミネルヴァ書房 二〇一四・五刊  
A5 三〇四頁 三八〇〇円

本書は一九世紀から二〇世紀初頭のロンドンとマンチェスターで開催された博覧会について扱っており、図版も多用された楽しい著書である。これら博覧会の提供側である中産階級を含む政府や王室の記述と、受け手である民衆側の歴史、そして建築・美術・産業史的要因がバランス良く叙述されている。

第一章では有名な一八五一年のロンドン万博開催に関わったヘンリー・コールや王立委員会、アルバート公の役割が述べられる。コールは従来貴族やエリートに独占されてきた美術の世界を庶民に開放し、工芸品に美術的価値を見出し、またそれらの見せ方や展示方法、さらにはその展示空間となった水晶宮でも民衆にとつて魅力的な演出を意識したと言う。

第二章では「シドナムの水晶宮」と題して、ここで行われたヘンデルの音楽などを使用した民衆教育と娯楽についての内容である。ここで登場するナショナル・ギャラリー館長の妻で著名な美術評論家であったレイディー・イーストレイクは、水晶宮を「教育と娯楽の融合の場」と表現し、これは当時の中産階級の知識人達によって信じられていた「合理的余暇」や「自らを高めるため

の余暇」と言う価値観と理念に関わるものであり、大変興味深い。

第三章ではマンチェスター美術名宝博覧会で展示された数々の有名絵画についてである。これらは大陸ヨーロッパのルネサンスや近世のものから同時代のラファエル前派の作品群であり、アルバート公やハーフォード公が収集したコレクションであった。イタリヤ・ルネサンス絵画から影響を受けてマンチェスターなどで開花した美術運動であるラファエル前派の絵画、また一八世紀の絵画作品などのそのコレクションの収集が、産業革命以来の経済発展によって台頭した裕福な中産階級のパトロネージによって担われた経緯、また彼らは美術教育の発展にも寄与したという重要な指摘がなされている。

そして第四章では一八六二年の第二回ロンドン万博についてであり、第一回目よりより拡大した様子、またクリミア戦争の影響やアームストロング社の大砲の展示など軍事的な要因を含んだことが示される。そして国際博覧会会場には幕末日本の使節団が派遣され、その時の様子や日本製品展示場での漆器や青銅器などの芸術的インパクトについて、さらに日本がこれに参加した経緯について述べられている。日本はこの国際的博覧会の有用性を認識し、積極的に参加する様になり、それは第五章で扱われる多額の経費を投じての日英博覧会・イン・ロンドンでピークに達する。

第五章は一九一〇年に開催された大盛況となったロンドンでの日英博覧会についてである。この会場では日本再現が行われ、両国の皇室や王室のこれへの関与、そして歴史館については日本の歴史的発展と日本の植民地となった台湾や韓国についての東洋館

の展示もあいまって大変興味深い。日本政府省庁館では日本の軍事的拡大が示唆され、美術の館では本来評価されるべき美術部門についての詳細が述べられ、イギリス側の美術の展示についても触れられ、日英の美術への相互認識の差異が浮き彫りにされる。博覧会での日本再現では日本の日清・露戦争での勝利や満洲鉄道の日本の近代化を誇示する文化的プロパガンダの要因が見られ、一方で仏像や水墨画、また庭園などの伝統的な日本美術の展示とのコントラストが描かれる。これら日本の博覧会展示にこめられた政治・外交的思惑についての分析は十分とは言えないが、日英同盟のシンボルとしての日英博覧会の意義が提示されている。日英博覧会の成功を祝う祝賀会でのノーフォーク公と加藤高明によるスピーチには、両国の外交的見解が示されている。

目新しい視点や史料を提示する研究と言うより、イギリスの二都で行われた博覧会について書かれた先行研究の文献や活字になっている当時の出版物を巧みに使用し、網羅的に解りやすくまとめた文化史研究である。使用する文献や資料は本書の性格上これで十分と思われるが、ヴィクトリア&アルバート博物館内の文書館に存在する博覧会に関しての文書や公文書館の一次史料があれば、よりオリジナリティーの高い研究となっただろうか。

(松本佐保)